



《子鹿》のふるさと—フォークアートとアジアの美術

2013年10月3日（木）～ 12月25日（水）

アジアギャラリーA

はじめに

あじび（当館の愛称）のキャラクターともいえる愛らしい《子鹿》。《子鹿》は、1940年代の初め頃、インドの東部、ベンガル地方に生まれました。アーモンド形の大きな目と、一筆描きのような大胆で太い身体の線が特徴的です。作者のジャミニ・ロイは、カルカッタ（現在はコルカタ）官立美術学校でアカデミックな西洋美術を学びましたが、その後、故郷ベンガル地方のフォーク・アート（民俗芸術）に回帰し、独自のスタイルを確立しました。特にその筆使いは、コルカタのカーリガート寺院の前で、参拝客向けのお土産として売られていた素朴な民画など、ポト絵と言われるベンガルの民俗画の様式を取り入れたものです。ジャミニ・ロイの限られた色で対象を大胆に簡略化して描くスタイルは、人々の評判を呼び、多くの追随者が出ました。

ジャミニ・ロイのように、大学など専門的な機関で美術を学んだ作家が、職人や地域の人々によって作られてきた民俗芸術を深く学び、作家の作品に取り入れるという試みは、インドのみならず、アジア各地で行われてきました。特にアジア各地が欧米の植民地から独立した後は、自分たちのアイデンティティを問い、アジアに固有の文化や伝統をテーマとした作品が見られました。また、90年代に大量生産、消費社会が進み、外部から圧倒的なグローバル経済の波が押し寄せると、その一方的に受ける影響を批判し、自分たちらしい生き方を模索しようとする作家たちの態度が鮮明になっていきます。

本展では、インドのほかに、中国の切り絵に学んだリュ・シェンジョン（呂勝中）や彼の学生だったウー・ジエンアン（鄔建安）、また、インドネシアの影絵芝居（ワヤン・クリ）に学んだヘリ・ドノやハリアディ・スワディ、同じインドネシアでも儀式の際の女性の髻（コンデ）の形とジャワ籐細工を融合させたニンディティオ・アディプルノモ、そしてフィリピンのルソン島の呪術的な伝統文化に学んだジョン・フランク・サバドなど9作家を、約20点の作品で紹介し、アジアの美術作家が、民俗芸術を深く学び、その様式、技術、素材を現代美術作品のなかに取り入れることによって、新しく美術の魅力を作り出した試みをじっくりとご覧ください。



▲ ジャミニ・ロイ(インド)
「子鹿」
グワッシュ・厚紙 制作年不詳

「3人の聖母」
グワッシュ・紙、合板 1943年
「母と子」
グワッシュ・厚紙 制作年不詳



▲ カムルル・ハサン（バングラデシュ）
「女性」
油彩・画布 1972年



▲ カーリガート派（インド）
「イヤリングを付ける女性」
水彩・紙 20世紀初頭



▲ カーリガート派（インド）
「身支度をする女性」
水彩・紙 20世紀初頭



▲ カーリガート派（インド）
「ペットの恋人をつれた女性」
「高級娼婦を抱くインド紳士」
「夫をたたく妻」
水彩・紙 20世紀初頭

中国の切り紙とリュ・シェンジョン（呂勝中）

中国では、春節（中国暦の正月）をはじめとした祭事に、切り紙でつくられた動物や草花の飾りは欠かせません。それは中国の人々の生活に根ざした民俗芸術として今も生きています。リュ・シェンジョン（呂勝中）は、こうした民俗芸術、とりわけ切り紙とそれを作る人々を深く調査し、インスタレーションという現代的な方法で表現してきた作家です。北京の中央美術学院の実験芸術学科で教鞭を執るリュ・シェンジョンの学生だったウー・ジエンアン（鄔建安）もまた、切り絵の特徴である左右対称の図像などを活かしながらも、新しく金属の素材を使い、より現代的なデザイン性の強い造形に展開させています。確実な技術に基づいた作品制作を大切に考えるリュ・シェンジョンの教えが、ウー・ジエンアンの作品に受け継がれています。

なお、10月18日から来年の1月28日まで、同じアジアギャラリー内で開催する「窓花／中国の切り紙」展では、中国黄土高原に生きる人々の暮らしの造形としての切り絵を紹介しています。あわせてお楽しみください。



◀ リュ・シェンジョン（呂勝中）
「和合の詩」紙（切り紙）1994年〔部分〕

「魂を集める（萃魂）」紙（切り紙）1994年
「替身（形と影）」紙、木、アクリル板 1995年

ウー・ジエンアン（鄔建安）
「手・脚」真鍮 2008年

インドネシアの影絵芝居とヘリ・ドノ

ヘリ・ドノは、インドネシアの古都ジョグジャカルタのインドネシア美術研究所で学んだ後、人形を用いた伝統的な影絵芝居（ワヤン・クリ）など、インドネシアの伝統芸能を貪欲に吸収し、自分の作品に展開させていきました。ワヤン・クリは、インドネシアのジャワ島やバリ島で、ヒンドゥー寺院の祭りなどで上演される影絵芝居です。影絵としてスクリーンに映し出される操り人形は、牛の皮で作られた平たい形で両腕が関節で動くような仕組みになっており、ヘリ・ドノの絵画に登場する人物も、平たい形で、手足が操れるように描かれています。ジャワ島生まれのハリアディ・スアディもまた、影絵芝居の人形や、それに加えて中国やイスラーム文化の影響を反映させた作品を発表しています。美術作家が、出身地の文化にこだわることで、インドネシアと自身の美術の独自性を探ろうとしたことの表れともいえるでしょう。



▲ ハリアディ・スアディ
「魔力と護符 I」
アクリル・ガラス 1990年



▲ ヘリ・ドノ
「芸術家は取り憑かれる」
油彩、紙・画布 1991年

その他の東南アジアの作品



◀ ニンディティオ・アディプルノモ（インドネシア）
「ジャワ男性の肖像」2001
写真（6点）※展示は5点

「私はそんなジャワ人ではない」
籐のヘアピース、木製棚、厚布、写真、
本、ファイバーグラスほか 2000-2001年



◀ ジョン・フランク・サバド（フィリピン）
「仲介者」ペン、インク・紙 2001年

「魂の窓」
混合技法 2000年
「森羅万象の6つの基点」
ペン、インク・紙 2000年
「静寂の音」
ペン、インク・紙 2001年